EU の言語政策と「オーストリアドイツ語」

坂野 久

1. EU の言語政策

1.1. EU の公用語と複中心語

EU 内での諸言語の使用とその立場は、次の三つの法的根拠に基づいている。その一つは2000年基本権利憲章である。その第21条項には、言語による如何なる差別的言動も禁じられており、さらに多様な文化、宗教、言語に注視することが必要であることが記されている。第二の法的根拠は、1965年のEC条約協定（Europäische Gemeinschaft-Vertrag）の第290条項である。そこには「共同体の諸機関における言語諸問題に関する規則は、評議会によって満場一致で採択される。」と記されている。これは現在のEUにも引き継がれている。第三の法的根拠は、「ヨーロッパ経済共同体（EEC）に関する言語問題規則」として評議会が1958年に発した指令第1条項である。そこには具体的に共同体諸機関の公用語（Amtssprache）と作業言語（Arbeitssprache）は、ドイツ語、フランス語、イタリア語、オランダ語であることが記されている。この条項も現在のEUに引き継がれ、共同体拡大の度に補充され、今日では27加盟国と23の公的言語が含まれている。加盟国の市民、政府・官庁は、それぞれの公的言語でEU諸機関に申請や問い合わせが可能であり、EU諸機関からの回答文書は問い合わせを受けた同じ言語で作成することになっている。EU諸機関の一つである欧州委員会（European Commission）内での作業言語は、英語、フランス語、ドイツ語であり、今日では英語が最も頻繁に使用され、フランス語、ドイツ語がそれに続いている。

公用語23言語のうち6言語（ドイツ語、英語、フランス語、ギリシャ語、オランダ語、スウェーデン語）（26％）が、EU内部にそのナショナルバリエーション（NV）をもつ複中心言語（die plurizentrischen Sprachen）（PZS）である。スペイン語とポルトガル語もPZSであるが、ヨーロッパ内ではNVをもっていない。27のEU加盟国のうち約半数の13カ国国の「国語」（Landessprache）がPZSである。ドイツ語は、ドイツ、オーストリア、ベルギー、ルクセンブルクで、フランス語はフランス、ベルギー、ルクセンブルクで、英語は英、アイルランド、マルタで、オランダ語はオランダとベルギーで、スウェーデン語はスウェーデンとフィンランドで、ギリシャ語はギリシャとキプロスで、「国語」となっている。
ところで、この複中心主義（Plurizentrität）は、EUの公的な諸機関内部でどのように扱われてきたのであろうか。1951年にEUの前身である欧州ロイアル鉄鋼共同体（EEC）が設立された時に（その後1957年に欧州経済共同体（EEC）と欧州原子力共同体（EURATOM）が設立され、1967年にECが設立される）、その創設当時の6国（フランス、ドイツ、ベルギー、オランダ、ルクセンブルク、イタリア）での各国の公用語は、フランスではフランス語、ドイツではドイツ語、イタリアではイタリア語、オランダではオランダ語、ベルギーではオランダ語（オランダ語）、フランス語、ドイツ語、そしてルクセンブルクではルクセンブルク語、ドイツ語、フランス語であったが、当時のECSCの公用語はフランス語、ドイツ語、イタリア語、オランダ語の4言語のみであった。この4言語のうちドイツ語、フランス語、オランダ語の3言語がPZSである。EUにおけるPZSの問題に関しては、オーストリアがEUに加盟する1995年の第4次EU拡大至公に議論されることがなかった。そこで次に、EUにおける複中心主義の扱いについて、オーストリアのEU加盟前と加盟後に分けて、検討することにしたい。

1.2. オーストリア加盟以前のEU公用語と複中心主義

EU諸機関内部における複中心主義の扱いに関しては、上述した「ヨーロッパ経済共同体（EEC）」の言語問題規則に基づいて評議会が1958年に設けた指令第1条に基づいている。即ち、それぞれの加盟国の憲法あるいは当該の法規則によって「国語」（Landessprache）と規定されている言語のみがEUの公用語となりうるのである。これは原則であり、実際にはそれぞれの加盟国が加盟交渉中にあるいは加盟後に、それぞれの「国語」をEU公用語として採択するよう要求する必要がある。たとえば、ルクセンブルクのルクセンブルク語とアイルランドのアイルランド語はそれぞれの国の「国語」であるが、EU加盟時にはEU公用語として採択を主張しなかった（その後、アイルランドはアイルランド語をEU公用語として認めるように主張し、2007年に公用語として認められた）。1973年第1次拡大ECで、イギリス、デンマーク、アイルランドが加盟し、英語とデンマーク語がECの公用語となった。さらに1981年第2次拡大ECでギリシャが加盟しギリシャ語がECの公用語になり、さらに1986年第3次拡大ECでスペインとポルトガルが加盟しスペイン語とポルトガル語がEC公用語となった。故に1993年のEU発足時には加盟12カ国（各国の公用語11言語）に対し、EUの公用語は9言語であった。この9言語のうちEU内のPZSは、英語、フランス語、オランダ語、ドイツ語の4言語である。それぞれのPZSの概要を以下に述べることにしたい。

英語は英国、アイルランド、マルタの公用語であるが、アイルランドではアイルランド
語と並んで第二の公用語となっている。アイルランドは1973年EC加盟の際にアイルランド語をECの公用語にすることを断念したのであるが、2007年以降EUの公用語となった。法律論争の際に審判のアイルランド語版が英語版よりも優先権をもつという特典が認められており、2002年の国勢調査では41.9％のアイルランド語話者が存在し、2006年のユーロパロメーターでは英語話者が94％、アイルランド語話者が11％存在することになっている。しかしアイルランド語を日常的に活発に話す住民は約5％（2003年には約2％）で、住民の大多数は英語を話しているのが現状である。アイルランド語をEUの公用語として主張した背景には、アイルランド人のアイデンティティをアイルランド語に見出し、それをシンボル化しているからであろう。故に英語のアイルランドバリアエーションに対する評価は全く顧慮されていない。他方、マルタではマルタ語が第一公用語で、英語が第二公用語である。アイルランドと反対にマルタ語を話す住民は約95.4％で、英語は約1.5％に過ぎない。故に英語のマルタバリアエーションも顧慮される場面は少ない。英語はアイルランドとマルタでの言語状況を配慮するとPZSと言えるかもしれないが、EU圏内では実質的に単中心言語（die monozentrische Sprache）（MZS）と言えるであろう。

フランス語もEU内ではPZSである。ベルギーとルクセンブルクはそれぞれ各国特有のバリアエーションを法的な規定に要求することはなかった。フランス語はフランス全土とベルギーのフランス語圏では唯一の公用語であり、ルクセンブルクでも司法分野のような公的な生活領域でフランス語が優勢であることがその理由であろう。そしてルクセンブルクの場合はその国の多言語性と話者数の少なさ、その地域特有のバリアエーションを規定に求めなかった要因と考えられる。またベルギーとルクセンブルクのフランス語話者は、フランスのフランス語を暗黙の裡に「標準」とみなし、いわゆるbon usageの理念に強く影響されている。ベルギーのフランス語の規範化は、Dictionnaire du Français de BelgiqueとLe français en Belgique10によって、1990年代後半に達成されたが、その言語学上の差異は語彙と発音に限定されている。したがってフランス語はEU圏内では英語と同様に事実上PZSではなく、MZSとみなされている。

オランダ語についても同様のことが言える。ベルギーの北半分に位置するフランドル地方のオランダ語も独自の法的な立場を要求していない。オランダ語は1962年にフランドル地域の公用語として公式に認証された。1970年にベルギー国土の半分の「単言語状況」が確立され、それ以降「単言語地域国家状況」が続いている。フランドルではさらに1950年代と1960年代にフランス語からの解放が発端となって、「標準オランダ語」（オランダのオランダ語）使用促進の大規模なキャンペーンが行われた。そしてフランドル地域独自の規範作成を回避するために、オランダと共同で共通の辞書編纂も進められた。このような背景から、ベルギーの二つのナショナルバリアエーションを法的規定に求めなかった理
由が理解できる。

ドイツ語は、今日の EU 栄内では、ドイツ、ベルギー、ルクセンブルク、オーストリアで「国語」となっている。ベルギーヴァリエーションを話す者は、一般的に約 65,000 人いるといわれ、そのヴァリエーションはいわゆる「半ヴァリエーション」と言われている。それは発話者が少ない故に言語全体に後々まで影響を与える。また地理的な状況から際立った言語学上の差異を発展させることもできないものである。ルクセンブルクのドイツ語もルクセンブルク語、フランス語と並んでルクセンブルクの国語であるが、ベルギーのドイツ語と同じような状況にある。故に、EU 創設以来「ドイツ語」とは常にドイツ（連邦共和国）のドイツ語を意味していた。

1.3. オーストリア加盟以降の EU 諸言語における複中心主義の問題


EU 加盟準備段階のオーストリアでは、言語的なアイデンティティ喪失の可能性について集中的な議論が行われていた。その際シンボル的な中心となったのが、このオーストリア特有の食料品表示の喪失をめぐる不安であった。他方、当時の EU 加盟国の中では、
ドイツ再統一後のさらなる「ドイツ語圏ブロック」形成に危惧を表明する傾向もあり、オーストリア政府は EU 加盟の国民投票の結果を確言できる状況になかったと言われている。そこで当時の大統領は、EU 加盟後もオーストリアの食料品と名産品がオーストリア特有の表現で表示可能な明確な規則が存在すれば、先のアンケート調査結果から見て、漁民投票での EU 加盟対立票が 5% 程度増えるであろうと判断し、「Erdäpfelsalat bleibt Erdäpfelsalat」（ジャガイモサラダはジャガイモサラダのままである）、「Alles bleibt, wie es ist」（旧正書法（全ては現在食している状態で変わることはない）等のスローガンを掲げて大々的に広告キャンペーンを展開したのである 14。
そして、さらなる対策がオーストリア EU 加盟議定書「第 10 条項」の作成であった。この「第 10 条項」について次に詳述することにしたい。

2. EU 加盟オーストリア議定書「第 10 条項」に付加されたオーストリア表現
2.1. 「第 10 条項」の概要
オーストリア議定書「第 10 条項」と付帯事項は以下のとおりである 15。

EU 枠内でのドイツ語の特別なオーストリア表現の使用に関する第 10 条項
EU 枠内では以下の点が有効である：

1. オーストリアの法律に含まれ、この議定書の付帯事項にリストアップされているドイツ語の特別なオーストリア表現は、ドイツのそれに対応する表現と同じ地位をもち、かつ同等の法的効果を有する。
2. 新たな文書をドイツ語で表現する場合には、付帯事項に挙げられている特別なオーストリア表現が、ドイツで用いられているそれに対応する表現に適切な形で付加される。
<table>
<thead>
<tr>
<th>オーストリア</th>
<th>EU 官報</th>
<th>邦訳</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Beiried</td>
<td>Roastbeef</td>
<td>ローストビーフ</td>
</tr>
<tr>
<td>Eierschwammerl</td>
<td>Pfifferlinge</td>
<td>杏茸・アンズタケ</td>
</tr>
<tr>
<td>Erdäpfel</td>
<td>Kartoffeln</td>
<td>ジャガイモ</td>
</tr>
<tr>
<td>Faschiertes</td>
<td>Hackfleisch</td>
<td>振肉</td>
</tr>
<tr>
<td>Fisolen</td>
<td>Grüne Bohnen</td>
<td>サヤインゲン</td>
</tr>
<tr>
<td>Grammeln</td>
<td>Grieben</td>
<td>炒めて脂を抜いたベーコン</td>
</tr>
<tr>
<td>Hürferl</td>
<td>Hüfte</td>
<td>腰肉</td>
</tr>
<tr>
<td>Karfiol</td>
<td>Blumenkohl</td>
<td>カリフラワー</td>
</tr>
<tr>
<td>Kohlsprossen</td>
<td>Rosenkohl</td>
<td>メジャベツ</td>
</tr>
<tr>
<td>Kren</td>
<td>Meerrettich</td>
<td>ワサビダイコン</td>
</tr>
<tr>
<td>Lungenbraten</td>
<td>Filet</td>
<td>ヒレ肉</td>
</tr>
<tr>
<td>Marillen</td>
<td>Aprikosen</td>
<td>アンズ</td>
</tr>
<tr>
<td>Melanzani</td>
<td>Aubergine</td>
<td>ナス</td>
</tr>
<tr>
<td>Nuß</td>
<td>Kugel</td>
<td>（牛・豚の）厚く切ったもも肉</td>
</tr>
<tr>
<td>Obers</td>
<td>Sahne</td>
<td>乳脂・クリーム</td>
</tr>
<tr>
<td>Paradeiser</td>
<td>Tomaten</td>
<td>トマト</td>
</tr>
<tr>
<td>Powidl</td>
<td>Pflaumenmus</td>
<td>スモモ（プラム）のムース</td>
</tr>
<tr>
<td>Ribisel</td>
<td>Johannisbeeren</td>
<td>スグリ（の実）</td>
</tr>
<tr>
<td>Rostbraten</td>
<td>Hochrippe</td>
<td>（牛の）肩ロース</td>
</tr>
<tr>
<td>Schlögel</td>
<td>Keule</td>
<td>もも肉</td>
</tr>
<tr>
<td>Topfen</td>
<td>Quark</td>
<td>凝乳・カード</td>
</tr>
<tr>
<td>Vogerlsalat</td>
<td>Feldsalat</td>
<td>野だしそ・サラダ葉</td>
</tr>
<tr>
<td>Weichselein</td>
<td>Sauerkirschen</td>
<td>スミノミザクラ（の実）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

2.2. オーストリア表現23語の検証

付帯事項に取り上げられた23語のオーストリア表現を個別に代表的な辞書で検証することにしたい。代表的な辞書とは次の8種である16。


Ostbelgien und Südtirol. Berlin-NewYork, de Gruyter.

記号の説明：
X = その辞書にその語が掲載されていない。
+ = その辞書にその語が掲載されているが、特別な表示と説明がない。
Ö = オーストリアで一般的な語として掲載されている。
Ö x Vbg = Vorarlbergを除くオーストリアで一般的な語として掲載されている。
Ö-ost = オーストリア東部（Burgenland, Wien, Niederösterreich, Steiermarkの一部）で一般的な語として掲載されている。
Ö x west = オーストリア西部（Vorarlberg, Tirol, Salzburgの一部）を除くオーストリアの地域で一般的な語として掲載されている。
D-sdost = ドイツの南東部で一般的な語として掲載されている。
CH = スイスで一般的な語として掲載されている。
SD = 南ドイツ地域（一部スイス、オーストリアを含む）で一般的な語として掲載されている。
ST = 南チロルで一般的な語として掲載されている。
B = ドイツバイエルン地方の bairisch（バイエルン方言）として掲載されている。
L = landschaftlich, regionalと地域が限定される語として掲載されている。
（ ） = 主にその地域で一般的であるが、例外も見られる。
調査結果を表で表すと以下のとおりである。

<table>
<thead>
<tr>
<th>AUSTRIAIZMEN</th>
<th>(1)</th>
<th>(2)</th>
<th>(3)</th>
<th>(4)</th>
<th>(5)</th>
<th>(6)</th>
<th>(7)</th>
<th>(8)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Beiried</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
</tr>
<tr>
<td>Eierschwammerl</td>
<td>Ö</td>
<td>+</td>
<td>L</td>
<td>+</td>
<td>(Ö x Vbg). CH</td>
<td>+</td>
<td>(B)</td>
<td>L</td>
</tr>
<tr>
<td>Erdäpfel</td>
<td>SD</td>
<td>+</td>
<td>SD</td>
<td>Ö</td>
<td>D-sdost</td>
<td>B</td>
<td>D-nrwf</td>
<td>B</td>
</tr>
<tr>
<td>Faschiertes</td>
<td>Ö</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Fisolen</td>
<td>Ö</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>(Ö x west)</td>
<td>(Ö x west)</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
</tr>
<tr>
<td>Grammeln</td>
<td>B</td>
<td>B</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td>D-sdost</td>
<td>(Ö x Vbg)</td>
<td>B</td>
<td>B, Ö</td>
</tr>
<tr>
<td>Hüferl</td>
<td>x</td>
<td>x</td>
<td>x</td>
<td>Ö</td>
<td>x</td>
<td>L</td>
<td>Ö</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Karfiol</td>
<td>SD</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td>+</td>
<td>(B)</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
</tr>
<tr>
<td>Kohlsprossen</td>
<td>Ö</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Kren</td>
<td>B</td>
<td>SD</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td>D-sdost</td>
<td>+</td>
<td>B</td>
<td>+</td>
</tr>
<tr>
<td>Lungenbraten</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Marillen</td>
<td>Ö</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td>Ö, ST</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
</tr>
<tr>
<td>Melanzani</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Nuß</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>x</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Obers</td>
<td>B</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>(Ö-ost)</td>
<td>(Ö-ost)</td>
<td>x</td>
<td>L</td>
<td>Ö</td>
</tr>
<tr>
<td>Paradeiser</td>
<td>Ö</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>(Ö x west)</td>
<td>+</td>
<td>(B)</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
</tr>
<tr>
<td>Powidl</td>
<td>Ö</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td>(Ö-ost)</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
</tr>
<tr>
<td>Ribisal</td>
<td>Ö</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>(Ö x Vbg)</td>
<td>(Ö x Vbg)</td>
<td>(B)</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
</tr>
<tr>
<td>Rostbraten</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
</tr>
<tr>
<td>Schögel</td>
<td>SD</td>
<td>SD</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td>+</td>
<td>B</td>
<td>+</td>
<td>L, Ö, CH</td>
</tr>
<tr>
<td>Topfen</td>
<td>B</td>
<td>B</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td>D-sdost</td>
<td>Ö</td>
<td>D-sdost</td>
<td>B</td>
</tr>
<tr>
<td>Vogelsalat</td>
<td>Ö</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>Ö</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Weichsel</td>
<td>x</td>
<td>+</td>
<td>+</td>
<td>Ö, CH, D-sdost</td>
<td>Ö, B</td>
<td>B</td>
<td>+</td>
<td>L, CH</td>
</tr>
</tbody>
</table>

各語の補足説明:

・**Beiried** は、1983 年の（1）には掲載されていないが、その他の辞書には特にオーストリ ア的な語として掲載されている。（6）のバイエルンドイツ語辞書には掲載されていない。

・**Eierschwammerl** はフォアアルベルクを除くオーストリアで使用されているが、スイスとバイエルン地方の一部でも使用されている。故に、特にオーストリア特有の語とは言えない。また、-erl の付く Eierschwammerl は主にオーストリア東部で、Eierschwamm はオーストリア西部とスイスで使用される。

・**Erdäpfel（Erdapfel）** は、オーストリアだけでなく南ドイツ全域、バイエルン地方、ドイツ南東部、さらにドイツのノルドランウェストフーレン地方（D-nrwf）でも使用されている。故にオーストリア特有の語とはいいえない。

- 8 -
・Faschierte(s) は、7つの辞書すべてでオーストリア特有の語として掲載されている。
(6) のバイエルンドイツ語辞書には掲載されていない。故に、オーストリア的な語といえる。
・Fisole(n) は、(6) には掲載されておらず、オーストリア西部を除く他の地域で使用されている。
ただし東オーストリアの一部とシュタイアーマルクでは、Bohn(en)schoten、ケルンテンでは Strankale が使われているので、オーストリア的な語であるが、オーストリア全域で一般的に使用されているとは言えない。（イタリア語からの借用語である。）
・Grammel(n) は、(6) にも掲載されており、他の辞書でもバイエルン語として掲載されている。
オーストリアでもアレマン方言のフォアアルベルク以外の全域で使用されているが、オーストリア特有の語とは言い難い。
・Hüferl は、(1)、(2)、(3) には掲載されていないが、(4)、(5)、(8) では、オーストリア特有の語として表示されており、(6) にも掲載されていないので、オーストリア特有の語といえるであろう。南ドイツでは Hieferl という表示で使用されている。
・Karföl は、オーストリアで一般的に使用されているが、(1) と (6) でバイエルン語と記されている。オーストリア特有の語とは言い難い。（イタリア語からの借用語である。）
・Kohlsprosse(n) は、(6) に掲載されていない。その他の辞書では掲載されており、オーストリアで特有で、一般的に使用されている語といえよう。
・Kren は、(6) に掲載されており、その他の辞書でもバイエルン語、南ドイツ地域で広く使用されていると記されているので、オーストリア特有の語とは言えない。（起源はスラブ系言語である。）
・Lungenbraten は、(1) には掲載されていないが、(6) にも掲載されていない。オーストリア全域で使用されているオーストリア特有の語と言える。
・Marille(n) は、南チロルでも使用されているが、オーストリア全域で使用されているので、オーストリア特有の語と言えるであろう。（イタリア語からの借用語である。）
・Melanzani は、(1) には掲載されていないが、(6) にも掲載されていない。オーストリア全域で使用されているオーストリア特有の語と言える。（イタリア語からの借用語である。）
・Nuß (Nuss) は、(1)、(5)、(8) には不掲載である。(6) には掲載されている。他の辞書にもオーストリアに特有な語という表示がない。
・Obers は、(1) にはバイエルン語と記されているが、(6) には掲載されていない。またオーストリアの北部に使用が限定されている。オーストリア西部と南部ではむしろ Rahm が一般的である。
・Paradeiser は、(6) ではバイエルンの一部で使用されているという表示があるが、最近
の辞書 (4) (5) (7) (8) ではオーストリア特有の語と記されている。ただし (7) によると東オーストリアで特に使用されており、西と南オーストリアでは Tomate も一般的になっている。

・ Powidl は、多くの辞書でオーストリア特有の語とされているが、(8) によると、特に東オーストリアで主に使用されている。(チェコ語からの借用語である。)

・ Ribisel は、バイエルンの一部で使用されている。オーストリアでフォアアルプルベルク以外で一般に使用されているが、オーストリア特有の語とは言い難い。(アラビア語、イタリア語からの借用語とみなされている。)

・ Rostbraten は、(1) (6) には掲載されていない。その他の辞書でも特にオーストリア特有の語という記載はない。

・ Schlögel は、南ドイツ、スイスでの使用が明示されており、オーストリア特有の語とは言い難い。Schlegel とも表記される。

・ Topfen は、バイエルン、ドイツ南部での使用が示されており、オーストリア特有の語とは言い難い。

・ Vogersalat は、バイエルン語辞書 (6) での記載がなく、オーストリア特有の語と言える。南チロルでは Vogelsesalat とも表記される。

・ Weichsel(n) は、南ドイツ、バイエルン、スイスでの使用が示されている。オーストリア特有の語とは言い難い。

従って、イタリック体で記した9つの語 (Eierschwammerl, Erdäpfel, Grammeln, Kariol, Kren, Ribisel, Schlögel, Topfen, Weichseln) は、Austriazismen「オーストリア特有の語」とは言えず、むしろ「南ドイツ語」あるいは「共通バイエルン語」と言えるものである。また Nuß と Rostbraten も Austriazismen とは言えず、むしろドイツ全般で使われている表現である。その他の太字 (ゴシック体) 表示の 12 語 (Beiried, Faschiertes, Fisolen, Hüferl, Kohlsprossen, Lungenbraten, Marillen, Melanzani, Obers, Paradeiser, Powidl, Vogersalat) が一般的に Austriazismen と言える語であるが、もちろん Fisolen, Obers, Paradeiser, Powidl のように使用地域が限定されておりオーストリア全域で使用されていない語も含まれる。また Austriazismen の判断基準としては共時的な面のみを採用し、その語の起源、借用等についての通時的側面については参考として表示するにとどめた。調査結果として、23 語中 12 語が Austriazismen と認められるが、その割合は約 52% にすぎない。元来オーストリア地域のドイツ語は、言語地理学 (方言学) 的には、フォアアルプルベルクがアレマン方言地域、チロル、東チロル、ケルンテンとサルツブルクの一部が南バイエルン方言地域、その他のオーバーオーストリア、ニーダーオーストリア、ブル
ゲンラント、ウィーン、シュタイアーマルクの3分の2地域が中部バイエルン方言地域に属している。オーストリアドイツ語のオリジナリティを食料品表示領域に求めようとした政治的な試みは、国民投票でEU加盟を決断することによってその目的を果たしたのであるが、その後残ったこの議定書の付帯事項に記されたAustriazismenの矛盾があらたに浮かび上がり、その社会言語学的観点からの判断と評価が求められる。そこでこの議定書第10条項の意義を以下に再確認することにすることにしたい。

2.3. 第10条項の意義

第10条項によって法的に承認された内容を箇条書きにすると以下の通りである。

1. 国際的に有効な文書で、オーストリア標準ヴァリエーションが存在することが認識された。

2. 副次的な文書（EU通達書、方針・大綱、立場表明など）にも、「EUドイツ語」として新たに23語が導入された。

3. オーストリアドイツ語表現の23語が、ドイツ連邦共和国のドイツ語と同値値と見なされた。

4. 法的に有効なこの23語は、文書の翻訳の際にも使用され、原則的には斜線を添えてドイツ連邦共和国の表現と共に表示される。

5. EUの法システムで、23語の「オーストリアドイツ語」の法的立場を明確化することによって、23語以外の「オーストリアドイツ語」の法的立場の改善が期待できる。

6. EUの諸機関における複数言語（PZS）に関する規則は、他のEU加盟国にとっても必要である。

7. 第10条項の内容は、ナショナル的・地域的な多様性の保持を強調するEU基本法憲章と一致する。

従って、第10条項の法的有効性は限定されており、控えめである。「オーストリアドイツ語」に関する一般条項が含まれていないので、付帯条項の23語に関して法文化が問題になった場合のみ、この条項が役割を果たすことになる。この付帯条項の文書の作成はシンボル的なジェスチャーであり、この文書の作成がオーストリア住民の抱いているアイデンティティ消失に対する不安を解消させるのではないかと考えられていた可能性がある。オーストリア政府の交渉団からは一般条項は要求されず、最大公約数的な解決が図られたようである。即ち、当時EU加盟国の一部とオーストリア以外の加盟国側からの抵抗があったと伝えられている。たとえば、翻訳業務にさらなる出費を恐れていたドイツは、オーストリアへ輸出される生産品の二重レッテル化の義務を、また加盟予定国であっ
たフィンランドはフィンランド語とスウェーデン語の二重レッテル化の義務を、さらにスペインは国内のカタロニア語、バスク語、ガルシア語がEUでの公用語を主張することを危惧していた。

3. EU内での「オーストリアドイツ語」の問題
3.1. 自由商品流通圏内の言語使用規定

このようにEU内での「オーストリアドイツ語」の法的立場は弱く、事実上EU内のドイツ語はドイツのドイツ語を意味しており、単中心言語（MZS）扱いされている。EUの言語政策では少数言語、地域言語の維持のために包括的な助成と保護が進められているのに対して、いわゆるナショナルヴァリエーション（NV）言語については、EU言語政策の「多言語性・複言語性」という方針から除外されている。約820万人のオーストリア住民が話す「オーストリアドイツ語」は、オーストリアのEU加盟後マスコミ等で取り上げられる機会が少なくなっているが、問題は解決されていない。

「オーストリアドイツ語」に限定された問題ではないが、EU内の商品表示（ラベル）の問題がこれまでにも発的になスコミで取り上げられ話題となってきた。ヨーロッパ裁判所（EuGH）によって各国の言語主権に矛盾する一連の判決が発表されたからである。その一つが1974年のDassonville判決である21。それはEU内の諸言語の複中心主義と各国の国語の使用を制限・規制するものである。そこにはEU内の自由な商品流通を優先する根拠、逆に言えばEU内での商業を直接・間接的に、また実際的・潜在的に制限することを禁ずる根拠が示されている。

また1994年のミネラルウォーターのフラマン語によるラベル無表示の問題に関するヨーロッパ裁判所（EuGH）の判決でも矛盾に満ちていた。それは明らかにベルギー国内の言語通達書違反であったが、EuGHは「食料品ラベル表示に、一定の言語を使用すべきだという要求は、EUの共同法（Gemeinschaftsrecht）に違反する」22と判断した。これはベルギー、特に北半分のフラマン語地域の住民を憤慨させた。EuGHの判決は1979年の共同法第14条の指針（9/112）に基づき、加盟国地域への食料品の輸出入は、「容易に理解できる言語」でラベルが作成されている場合、許可されるという判断であった。ベルギーの国語の一つであるフランス語がこの基準に該当したが、フラマン語が除外され、加盟国の言語主権が無視された判決であった。

EU域内市場政策担当委員であったBolkesteinは、この種の問題に関して慎重に次のように述べている。
「一定の言語に使用限定しようとする委員会の取り決めは、生産品の流通促進を顧慮している。それらの生産品はヨーロッパの文化的多様性を反映している場合が多いので、そ
EUの言語政策と「オーストリアドイツ語」

の際同時にそれらの生産品の特徴もできるだけ多くの消費者に知らせる必要がある。特に食料品のラベル表示に関する各規則は、消費者への通知と消費者保護が最優先されるべきである。実際には各国の国語による表示が最も適切である。適度な正当性ないしは処置を承認させてはならない、それは消費者にとって不利益になるからである。」

しかしながらさらにオーストリアで2003年に問題となった事例が、俗に「マレード戦争」といわれるMarmeladeとKonfitüreの表示を巡る争いである。オーストリアWachauの生産者が伝統的なラベル表示であるMarillenmarmeladeを使用した事例である。1979年のいわゆるKonfitüre通達により、MarmeladeはKonfitüreと表示しなければならなかったからである。この事件はマスコミに大きく取り上げられ、オーストリアの一般市民を巻き込む論争となったため、例外規則が設けられ、Marmeladeという表示も認可されたのである。オーストリア議定書第10条の付帯事項に示された23語の食料品名が物語るように、オーストリアでは食料品表示名はシンプル（鋭敏・過敏）な言語問題といえるかもしれない。オーストリアではそれ以来「言語的な差別」を受けているという印象が強まった。オーストリアでは一般的なKonkurrenz, Budget, Konsumentは、EU法では認定されておらず、ドイツのドイツ語であるWettbewerb, Haushalt, Verbraucherを使用しなければならない。法律用語では基本的にオーストリア表現の使用は許されていない。

これらの例が示す通り、EUの言語政策は多言語・複言語重視を掲げながら、極めて重要な法的分野になると、複中心主義ではなく単中心主義を優先し、ナショナルヴァリエーション（NV）を拒否している。これは翻訳・通訳に費やされる莫大な出費の面からみれば、一面では理解可能なことではあるが、他方それによって加盟国の平等原理が疑問視される大きな問題を投げかけていっている。

3.2. オーストリアドイツ語の課題

オーストリアのEU加盟後も「オーストリアドイツ語」の立場は加盟以前とほとんど変化がないといえよう。オーストリアの翻訳家や通訳の多くはドイツ出身の同僚や上司から言語上の訂正を指摘され、ナショナルヴァリエーション（NV）としては標準の表現を否認・拒否される経験を持っている。逆に言えばオーストリアのNVをドイツ語の標準語と考えている人々はEU諸機関での言語業務で採用されるチャンスが少ないと言える。この問題を解決し、ドイツのドイツ語とオーストリアのドイツ語が同価値であることを主張するための前提条件は、以前から指摘されていることではあるが、NV標準語といえる「オーストリアドイツ語」の十分な収集と信頼に値するコーパスの作成であろう。

その欠点を補うために、R. Muhrは「オーストリアドイツ語研究センター」を設立し、
オーストリアとドイツの法律用語上の差異を研究する目的を持つプロジェクト（ATREM）を提案した。オーストリアの法律言語の表現は、第10条で用語を採択するために設けられた4基準のうち、3つを満たしている。それらは明らかに「標準語的な特性」を持ち、「オーストリア全域に有効」とあり、オーストリアの法律内で証明可能」なものである。ただし第4の基準である「（ドイツとオーストリア）共通の法体系の下での証明可能性」が欠けている。これはEUの専門法律用語の包括的な信頼できる研究がまだ十分に存在しないことに起因している。同じ用語を使用する二つの加盟国の法律言語における差異は、両国間の法的知識に対して大きな問題を投げかけるだけでなく、EU全体の法システムに対する問題提起でもある。

このプロジェクトの目的は、オーストリアとドイツの法システムの用語上の差異に関する信頼できる科学的な報告を作成することであり、それらをデータバンクへ追加することである。差異が見つかった法律用語はIATEデータバンクへ登録され、他のEU作業語である英語とフランス語で同価値である用語も追加される。

R. Muhrによると、16ヶ月の研究期間を経た時点で、1540件のオーストリア特有の法律用語が登録された。またオーストリアの法システムでは対応できないドイツで使われている用語が1500件以上見つかったと報告されているが、その詳細については資料の整備をまって改めて論じる必要があるであろう。

4. おわりに

第1章では、EUの言語政策を、EUの公衆語と複中心言語（PZS）の面から概略した。特にPZSと見なされる公衆語は、オーストリア加盟以前では、EU内では実質的に単中心言語（MZS）として機能していたが、オーストリア加盟以降は「オーストリアドイツ語」という話者人口の大きなナショナルヴァリエーション（NV）の登場により、問題が複雑化したことを指摘した。

第2章では、その問題を解決するための一手段とみなされたEU加盟オーストリア議定書第10条項について概略し、それに附則されていた23語の「オーストリア特有の表現」を再検証した。23語中9語はドイツの南ドイツ語あるいはバイエルン語といえるもので、オーストリア特有の表現とは言えなかった。また2語はオーストリアよりもむしろドイツで一般的に使用されている語と判断し、最終的に12語のみがオーストリア特有の語と判断された。オーストリアのEU加盟をめぐる国民投票直前に設けられたこのような附則事項に掲載された23語の「オーストリア特有の表現」は、言語地理学的（方言学的）に矛盾に満ちたものであるが、EUの言語政策を社会言語学的に論じる際に、この議定書第10条項は興味深い条項であり、その存在意義を再確認した。
第3章では、EU 内での「オーストリアドイツ語」の法的な位置とその問題点を指摘し、今後の課題等を指摘した。特に EU 内の商品表示（ラベル）での言語問題を巡って、ヨーロッパ裁判所 (EuGH) の判決が EU 各国の言語主義と矛盾するケースを紹介し、PZS の代表と言われるドイツ語が、EU の法的な領域では実質的に MZS となっていることを指摘した。そして「オーストリアドイツ語」の法的な地位を確立するためには、オーストリアとドイツの法律専門用語の比較対照研究が必要で、現在その研究プロジェクトが進行中であることを見出した。

EU が拡大し EU の公用語もそれに応じて増加しつつある。2007 年の第 6 次 EU 拡大時点での加盟国 27 国、公用語 23 言語を数え、EU の公用語政策は基本的に公用語を平等に取り扱う政策を維持している。EU では話者人口の少ない少数言語に対する言語保護政策も進みつつあるが、「オーストリアドイツ語」のような話者人口の多い NV に対する対処法を EU の公用語政策はまだ考えていない。オーストリアの EU 加盟以降に見られた法的面からの言語問題が今後の課題であり、EU 言語政策の一つの試金石となるのではなかろうか。

注

4 Amtssprache（公用語）、Arbeitssprache（作業言語）は英語の official language, working language に該当する。
5 EU 作業言語としてのドイツ語に関する諸問題については Ammon, U. (2007) を参照。
6 「複中心言語」の定義については、坂野（2006）, S. 59ff. を参照。
7 ここでいう「国語」は英語の national language, フランス語の langue nationale に相当するが、ドイツ語では、「民族的・文化的」、「地理的・領土的」、「統治機構・国家的」な意味合いで、Naionalsprache, Landessprache, Staatssprache と使い分け
けられている場合が多い。

11 「オーストリアドイツ語」とアイデンティティについては、坂野（2008）を参照。
12 「オーストリアドイツ語」の言語特徴については、坂野（2002），S. 2ff., 坂野（2008），S. 61ff. を参照。
17 オーストリアの正書法辞典 ÖWB についての詳細は、坂野（2001）を参照。
18 ドイツ語圏の代表的正書法辞典 Duden については、坂野（1998）を参照。
22 Markhardt, H. (2005), S. 112.
30 Markhard, H. (2006) で法律、経済、財政分野の専門用語の対照研究が進みつつある。


《参考文献》


Spezial, 243/Welle 64. 3.
大前研一（2009）: "衝撃！EUパワー"、朝日新聞出版。
坂野久（1998）：ドイツ語正書法辞典（Bertelsmann と Duden）について、近畿大学教養部紀要第30巻、第1・2号、35-45頁。
坂野久（2001）：オーストリアの正書法辞典 - 特にÖsterreichisches Wörterbuchについて - 、近畿大学語学教育部紀要第1巻第1号、99-111頁。
坂野久（2002）："オーストリアドイツ語"をめぐって、近畿大学語学教育部紀要第2巻第1号、1-10頁。
坂野久（2005）："オーストリアドイツ語"と言語政策、近畿大学語学教育部紀要第5巻第2号、23-33頁。
坂野久（2007）：オーストリア第二共和国の言語政策、近畿大学語学教育部紀要第7巻第2号、65-85頁。
坂野久（2008）：オーストリアドイツ語とアイデンティティ、近畿大学語学教育部紀要第8巻第2号、53-74頁。
坂野久（2009）：オーストリアの土着少数派と言語政策、近畿大学語学教育部紀要第9巻第2号、185-211頁。
渋谷謙次郎（編）（2005）：欧州諸国の言語法、三元社。
高橋秀彰（2010）：ドイツ語圏の言語政策、関西大学出版部。
辰巳浅嗣（編）（2009）：EU欧州統合の現在、創元社。